

特別講演

「アジアの障害者、そしてスポーツ——1枚の写真から」

武田 剛

「たくさんの笑顔に出会いたい」——。そう願ひ、私はカメラマンになりました。大勢の人に会える新聞社に入ったのも、そのためです。しかし、現実は大違いでした。次々と起きる事件や事故、そして天災。そこで目にするのは、悲しみくれる被害者や遺族、被災者の姿ばかりで、辛い取材が続きました。

1999年、タイであった障害者スポーツのアジア大会「フェスピック」。そこで出会った片足のネパール選手が、私の写真を変えてくれました。ヒマラヤの貧しい山村で育った彼は、高価な義足が買えません。杖をつき、必死でトラックを疾走する姿に、私は圧倒されました。

「競技用の義足をはいた先進国の選手に負けなかった」

彼の言葉には「生きる力」がみなぎっていました。以来、私はアジアを歩き始めます。力強く生きる人たちから、私自身が力をもらうためです。

2年後、私は彼に会うため、ネパールを訪ねました。

クリシュナ・クマール・ライさん(27)。首都カトマンズの郊外で独り暮らしでした。裸電球が灯る1畳の部屋。月600円の家賃も、失業中で払うのに苦労していました。

「このままだと故郷に帰らないと。もう走れないかもしれない……」

ネパール東北部・エベレスト山麓の村で生まれました。両親は急斜面の段々畑で、ジャガイモやソバを作っていました。

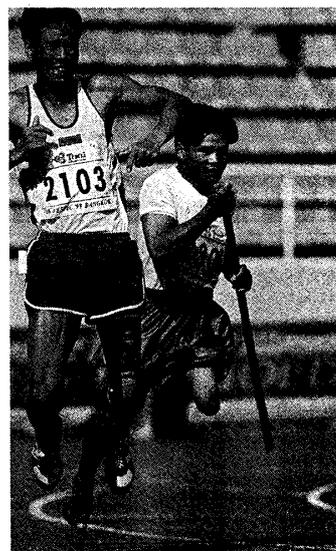
生まれて半年後、悲劇が襲います。かまどの周

りをはい回るうちに薪が崩れ、左足の上に覆いかぶさったのです。軟らかい肌はドロドロになり、ふくらはぎと太ももがくっついてしまいました。医者のある街まで歩いて4日。何もできませんでした。

杖を握ったのは10歳の時。高地牛の世話で放牧地を歩き回り、右足と両腕はみるみる鍛えられました。しかし、畑仕事には義足が必要です。首都に行けば何とかなる。そう信じ、14歳で村を後にしました。

カトマンズではネパール障害者協会が運営する、国内唯一のリハビリ施設を訪ねました。敷地内には、外国NGOの職業訓練校と障害児の孤児院もあります。

クマールさんは半年間、仕立屋の訓練を受け、



▲杖を頼りにトラックを疾走するクマール選手(右)

武田

町工場で働き始めました。給料はシャツ1枚で40円。必死にミシンを踏んでも日に4枚しかできません。足の切断手術もしましたが、1本1万6千円の義足は買えませんでした。

村を離れて10年。24歳でチャンスをつかみます。山で鍛えた俊足が認められ、フェスピックの陸上選手に選ばれました。フェスピック連盟（本部・大分県）は大会ごとに発展途上国の選手を招待しており、ネパールに3人の枠が与えられたのです。

大会は「夢の世界」でした。バネのような義足で跳びはね、レース用の車いすで疾走する先進国の選手たち。聞けば60万円もする製品で、一生懸命に働いても、とても買えません。故郷の檜の木で作った杖を握り締め、彼は必死に走りました。

「杖しかない自分が惨めでした。義足があれば絶対に負けないのに……」

帰国後、念願の義足を買いました。国の補助がないため、兄の助けを借りました。大会で見たのと違っていましたが、一応、足の形はしていました。しかし、期待して足を入れると、痛くて歩けません。先進国が昔に使っていた古いタイプだったのです。

「ネパール初のパラリンピック選手になりたいんだ」

杖の生活はまだ続いていますが、彼は夢を諦めずに、毎日ミシンを踏み続けています。アテネでの再会を約束して、私はネパールを後にしました。

◇ ◇ ◇ ◇

内戦終結から10年を迎えたカンボジアでは、地雷で足を失った男たちが、シドニー・パラリンピック初出場を目指し、バレーボールを必死で追いかけていました。

内戦中、兵士だった人が大半で、外国NGOのリハビリ施設などで練習を続けてきました。他の競技は予算不足で参加を断念。バレーボールだけは、フェスピック・バンコク大会で銀メダルを取ったことが評価され、参加にこぎ着けました。

練習は痛みとの闘いです。競技用の義足が手に入らず、普段使っている義足で、無理にジャンプ



▲物ごいの元兵士。地雷で両足を失った

を繰り返していたからです。それでも選手たちは「自分たちが世界の舞台に立つことで、平和の尊さを世界中の人たちに知ってもらいたい」と、必死にボールを追っていました。

ノック・ロタ選手（32）もそのひとり。反政府軍の兵士だった12年前、タイ国境で地雷を踏みました。森に隠してあった食糧を取りに行く途中でした。近道しようと、茂みの中に足を踏み入れた途端、左足に激痛が走り、体が宙を舞いました。足の肉と骨はボロボロに砕け、地面は真っ赤な血で染まりました。

自殺まで決意したロタさんを救ったのは、米国のNGOからもらった義足でした。リハビリのつもりで始めたバレーボールに夢中になるうちに、代表選手にまでなったのです。

「シドニーで活躍して、障害者にも無限の可能性があることを、カンボジアの人たちにも知ってもらいたい」

その2カ月後、彼らはシドニーにやってきました。開会式で「カンボジア」のアナウンスが流れると、超満員の五輪スタジアムは拍手と歓声の嵐に包まれました。スタンドに手を振る選手たち。みんな満面の笑顔です。私もあまり嬉しくて、こみ上げる涙をこらえながらシャッターを切ったからでしょうか。せっかくの晴れ舞台なのに、と

「アジアの障害者、そしてスポーツ——1枚の写真から」



▲板にキャスターを付けただけの手製車いすで移動する障害者。車いすは貴重品だ

うとうとい写真が撮れませんでした。

◇ ◇ ◇ ◇

そして、長年の内戦が終わったばかりのアフガニスタン。街にあふれる障害者の多さに目を疑いました。地べたをはう両足のない物ごい。がれきの中をカメのような速さで進むボロボロの車いす……。社会の片隅に追いやられながら、大勢の障害者たちが必死に生きていました。

20年余りの戦争が、多くの障害者を生み出しました。正確な統計はありませんが、障害者人口は推定で100万人。地雷の犠牲者も後を絶たず、今でも月に約300人が足を失うなどの被害に遭っています。昨年6月に新政権が発足しましたが、政府は何の施策も打ち出せていません。

そんな中で、アフガニスタン障害者協会が今春、活動を再開しました。タリバーン時代に破壊された事務所を直し、「自立して生きる道を見つけた

い」と、職業訓練施設の再建などを始めたのです。

日々、生きることが精いっぱいの中で、スポーツなどは遠い夢の世界です。が、思い切って質問してみました。「パラリンピックって知ってますか」と。すると、ある会員が「おお、知ってるよ、車いすでバスケットボールするんだろ」。続いて、ほかの男たちが「マラソンもできるらしいぞ」……。みんな目を輝かせていました。

その表情が忘れられず、昨年10月、日本の車いすランナーと一緒にカブールを訪ねました。みんなにレース用車いすに乗ってもらい、障害者スポーツの魅力に触れてもらいたかったからです。そして、最後に彼らは私たちに訴えてくれました。「アテネ・パラリンピックには、私たちの代表をぜひ出したい」

◇ ◇ ◇ ◇

フェスティックで撮ったネパール選手の写真。このたった1枚の写真から、すべての出会いが始まりました。中には、元気に笑顔を浮かべる子供たちもいますが、その大半が貧困に苦しむ人たちです。満足な仕事にありつけず、その日暮らしの人ばかりですが、ほぼ全員が訴える言葉があります。

「チャンスさえあれば、自分にもできる」

そんな彼らの訴えを伝えたい。そして、私の写真がこの現実を少しでもいい方向に動かす、そのきっかけになってくれればと願い、これからも取材を続けて行きたいと思っています。



▲デコボコ道に車いすがはまると、子供たちが元気に押してくれる



▲被害を避けるため、地雷教室で勉強する子供たち